

平成26年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT26022

【プログラム名】アニマルミステリー2014～飼育動物から生まれた
大地の恵み～



開催日：2014年7月27日(日)

実施機関：宮城教育大学(宮城教育大学)
(実施場所)

実施代表者：齊藤千映美
(所属・職名) (環境教育実践研究センター・
教授)

受講生：小学校5.6年生:15名

関連URL：

【実施内容】

○プログラムの工夫

本事業は、小学5、6年生を対象とするものであり、環境に配慮した食生活のあり方について、動物とのふれあい体験から学び考えるプログラムである。

人類は動物性のたんぱく質を多く口にしている。また、家畜を育てるためには、さらに地球上で多くの資源が使われており、じつは人間と家畜の関係は、将来の食糧問題にも密接につながっている。

プログラムでは、講義の後、ヤギ、ウコッケイなどとの飼育動物とのふれあい、観察を行った。次に、ヤギの乳搾り、チーズづくり、ウコッケイ卵を使ったホットケーキづくりなどの活動を通じて、動物の生命活動への好奇心と共感を育み、日本の食糧と畜産の課題について考えてもらった。最後に、その日の観察活動で学んだことについて、クイズ形式でグループごとにまとめ、発表会を行った。

参加者は、一部のウェブ上での申込者を除いては、ポスターを作成して募集した。宮城教育大学附属小学校に配布したところ反響が大きく、他の小学校に配布する前に定員となった。15名の中には、遠方(関西)からプログラムに参加するために来た家族があり、また2名は前年度参加したリピーターである。

参加した児童の保護者の見学も多く、保護者の熱意が感じられた。

当日は、日常的に動物の飼育に携わる学生たちが実施のサポートを行うことにより、参加児童への細やかな配慮や安全管理が可能であり、実施者としても安心してプログラムを進めることが可能であった。

○当日のスケジュール

- 09:10-09:30 開講式(あいさつ)
- 09:30-09:40 ヤギ使いになろう(アイスブレイク)
- 09:40-10:25 動物の健康観察とふれあい
- 10:30-11:15 ヤギの乳搾り
- 11:20-12:00 チーズづくり
- 12:00-12:45 クッキータイム
- 13:00-13:45 講義(これからの食生活)
- 13:50-14:35 未来博士号の授与、アンケート記入
- 15:00 解散

○実施の様子



↑ヤギミルクを用いたチーズ作り



↑学びの発表

○事務局との協力体制

- ・事務局は実施時期の調整、広報活動、参加者申し込みのとりまとめ、保険加入、予算執行にあたり教員に対して全面的に効率的な支援を実施した。メールでの情報交換だけでなく、顔を合わせての打ち合わせの回数も多く、円滑に事業の実施が可能であった。
- ・地元情報誌「ままぱれ 宮城版」に案内情報を掲載した。
- ・県内の小・中や各教育施設(美術館・博物館・図書館など)計850校にカラーパンフレットを配布した。
- ・本学の専用HPを立ち上げ広報を行った。本学のツイッター・フェイスブックにも記載した。
- ・独自にチラシも作成して配布した。

○広報活動

- ・地元情報誌「ままぱれ 宮城版」に案内情報を掲載した。
- ・県内の小・中・や各教育施設(美術館・博物館・図書館など)計850校にカラーパンフレットを配布した。
- ・本学の専用HPを立ち上げ広報を行った。本学のツイッター・フェイスブックにも記載した。

○安全への配慮

- ・屋外活動を実施することから、参加者・主催者は全員、傷害保険に加入した。
- ・当日は、安全配慮のため、ふれあい活動の前に注意事項を参加者に直接、実演しながら伝達した。ふれあいの前後に手洗い消毒と足底消毒を行った。
- ・子どもたちを小グループに分け、それぞれのグループに学生を配置して、怪我のないよう見守りと支援を行った。ヤギのそばには、それとは別に担当学生を配置し、事故がないよう管理を行った。
- ・火気を取り扱うため、調理の際、コンロには学生が必ず付き添うようにした。広いスペースを確保して安全を確保した。
- ・参加者には事前に問い合わせを行い、アレルギー対応の必要性を確認した。

○今後の発展性と課題

本事業は通算3回目となる。動物とのふれあいは子どもたちの多様な感覚を用いた学習につながり、印象深いプログラムであることから、今回実施したふれあいとミルクを活用するプログラムの根幹は完成形に近いと考えている。ただ、学習の進め方や実施の時期、広報の手法など、手法についてはさまざまな試行錯誤の余地がある。また、他にも、本学で飼育しているウサギやウコッケイを用いた同様のプログラムも実施が可能である。野外体験学習を含むため、大人数での実施はどうしても難しいが、できるだけ開催の機会を増やし、地域の児童生徒にこのプログラムでなければありえないような体験的学習を保証したいと考えている。

なお今年度の具体的な反省点は以下のとおりである。

・時間配分: 炎天下での観察を含むため、長時間のプログラムは実施が望ましくないと考えている。しかし、このため、「ふれあいと観察」「ミルクと卵を使った調理活動」「学びを深め伝え合う活動」の3つのうち、3つめの伝え合う活動の時間が十分にとれていないと感じられた。調理活動は好評であるが、簡略にできるところはするべきであろう。

・施設について: 宮城教育大学では、一定程度の集団が観察や調理活動を含むグループ学習をできるような実習室があまり多くない。そのため当日は、一般教室を使用した。安全面などでの問題はなかったが、事前事後の机や備品のセッティングに相当の手間がかかった。次回は、日程を決めるときに、最も適切な施設を使えることを確認する。

・開催の時期: 開催可能な時期のうち、なるべく早い時期でないと乳搾りができないため、夏休みの開始直後を開催日としたこのため暑さ対策に相当の配慮をしなければならなかった。夏休みより以前にプログラムを実施できるような日程で実施したい。

・参加者の人数: ふれあいプログラムとしては、1回の参加者の上限人数を設定せざるを得ない。しかし、このため、ほとんど広報活動をしないうちに募集を締め切り、お断りせざるを得なかった。2回開催にするなどの検討が必要である。(ただし、そのためには、開催可能な時期の前倒しを希望したい)

【実施分担者】

なし

【実施協力者】

17 名

【事務担当者】

中嶋 恵里 研究・連携推進課研究協力係